

日本書紀の国名表記について

北 川 和 秀

一、はじめに

近時、大量の木簡（特に荷札木簡）の発掘とその解説整理のお陰をもって、古代における行政地名表記の実際が次第に明らかになってきている。木簡を主な資料とした考察によつて、古代地名二字表記化の経緯を私は以下のように考えている。^{注1}

大宝年間（大宝四年頃か）、国名が二字に統一され、和銅四年頃には郡里名も二字の嘉名で表記するようにとの命令（文言は延喜式に採録された如きものであったと推測される）が出された。さらに、和銅六年に出された風土記撰進の詔の第一条に、郡郷名（当時の名称に従えば「郡里名」とあるべきもの）は好字で表記せよとある。この「好字」とは、適切な文字、相応しい文字の意で、すでに出されている和銅四年頃の二字嘉名を踏まえたものと考えられる。諸国はこの命を受けて、それぞれに風土記を編纂し、そこに記述される郡郷里名はことごとく二字に統一されることになったのであろう。風土記の撰進が遅れて

いる国に対しては、出雲国風土記に見られるように、民部省の口宣によつて、督促がなされ、それを受けて、行政地名の二字化を果たした上で、風土記撰進に到つたものと考えられる。

朝廷がなぜ行政地名を二字に統一しようとしたのか、その意図は明らかではないが、当時の、中国を強く意識した律令国家建設の過程で、藤原京を造り、大宝律令を作り、平城京を造り、日本書紀を編纂した時代背景を考えると、中国の地名の多くが二字であることを意識し、これに倣おうとしたものではないかと推察される。国名（令制国の名称）については、国印鑄造の便宜のためと考える鎌田元一氏の説があるが、それが主たる目的であったかどうか。主たる目的はやはり中国を意識したもので、国印鑄造上の便宜は従の目的であったのであろう。

木簡は当時書かれたままの一次資料であり、当時の実際の表記をよく伝えている。これに対し、編纂物である記紀、風土記、万葉集における地名表記の実際を明らかにしたい。

本稿においては、そのうちの日本書紀の国名表記について考

察する。

日本書紀の収録範囲は神代から持統天皇の退位（六九七）までである。その後、大宝律令の成立、平城遷都を経て、養老四年（七二〇）の日本書紀撰進に到る。

国名表記は大宝年間（七〇一―七〇四）に大きく変わったので、変わる前を旧表記、変わったあとを新表記と呼ぶことにすると、日本書紀に記述された時代は全て旧表記の時代であり、日本書紀の編纂がヤマ場を越えて、実際に撰進されたのは新表記の時代ということになる。そこで、日本書紀の実際の表記が新表記に依っているのか、旧表記に依っているのかを考察することは、日本書紀編纂の方針の一つを窺うことに繋がり、また日本書紀の国名表記を奈良朝初期の国名表記史の資料として用いる上でも必要なことと考える。本稿では、そういう観点から日本書紀の国名表記を考察する。^{注3}

二、日本書紀における国名表記の概要

日本書紀における国名表記の例数を表にして示す。ここでの「国名」とは令制国の意であり、名称を含めて令制国に直結するもののみを対象とした。従って、兎狭国、浪速国、碩田国、襲国などは含めない。穴門（穴戸）国は、長門国の古名と見て対象とした。

筑紫は、九州全体を指す場合と、後に筑前・筑後に分割される九州北部地域を指す場合とがあるが、例数には両方を含んで

いる。天武朝頃に分割されて令制国となった越国、吉備国、豊国、火国（肥国）は対象とした。

歌謡に登場する万葉仮名の例は含めない。

国名と共通するものであっても、氏族名や人名は含めない。

表における「旧表記」「新表記」の判断は、古事記や木簡を参考にした。大宝以前も以後も表記の変わらないものについては新旧表記の間の野線を外した。

表中の数字は用例数を示す。

依拠した本文は、岩波書店の日本古典文学大系本の『日本書紀』上・下を用い、漢字の字体は原則として新字体に変更した。

よみ	古事記	旧表記	新表記
やまと	倭／大倭	倭62	大倭12
やましる	山代		山背19*
かふち	川内 河内		河内36
つ		津3	摂津12
いが	伊賀		伊賀8
いせ	伊勢		伊勢51
しま	嶋		志摩2
をはり	尾張		尾張18
みかは	三川		参河1
とほつあふみ	遠江		遠江4

たには	さど	こし	わかさ	みちのく	しもつけの	かみつけの	しなの	ひだ	みの	あふみ	ひたち	かみつふさ	あは	むざし	さがむ	かひ	いづ	するが
丹波 旦波	佐度	高志	若狭		下毛野	上毛野	科野		美濃 三野	淡海 近淡海	常道		淡	无耶志	相武	甲斐		
		越39	若狭2	道奥2	下毛野3	上毛野2	科野1			淡海1			淡1			甲斐6		
丹波15	佐渡1	佐渡6	越前2	陸奥9	下野1	上野4	信濃13	飛騨3	美濃22	近江74	常陸3	上総4		武蔵9	相模4	伊豆7	駿河2	

つくし	とさ	いよ	さぬき	あは	あはち	き	ながと	すは	あぎ	きび	はりま	おき	いづも	いなば	たちま
竺紫 筑紫	土左	伊予 伊余	讃岐	栗	淡道	木ノ紀	穴門	周芳	阿岐	吉備	針間	隠伎	出雲	稲羽	多遅摩 多遅麻
竹斯1	筑紫後1	筑紫166		栗2		紀9	穴戸4	周芳5		吉備中1	吉備23	億岐6	出雲26		
筑後1	土左6	伊予16	讃岐2	阿波4	淡路26	紀伊22	長門4		安藝8	備後2	播磨24		因幡1	因播3	但馬9

とよ	豊	豊4	豊前1
ひ	肥	火4 肥1 火前1	肥後2
ひむか	日向	日向19	
おほすみ		大隅7	
さつま		薩麻1	
いき	伊岐	壱岐4	
つしま	津島	津島1	対馬15
たね		多祢8	

* 「山背」について。古典大系本には、欽明三十一年四月二日条に「山城国相楽郡」とあるが、欽明紀（卷十九）の現存最古の写本である北野本に「山背国相楽郡」とあるのによって、「山背」と改訂した。「山城」は、平安遷都後に、それまでの「山背」を、都のある国の国名表記に相応しく「山城」と改めたもので、それ以前にはこの表記の例を見ない。北野本の本文に従うべきであろう。

記紀の主要な国名のうち、伊勢、尾張、出雲、日向など二字のものは、大宝以降にあってもそのままの表記が継続して用いられている。

記紀の主要な国名であっても、倭、近淡海、木・紀など非二字のものは、大宝以後、表記は二字に改められている。

右の表からは、日本書紀の国名表記は、原則として新表記が

用いられているが、一部に例外がある。本稿ではそれらの例外を中心に検討してゆく。

三、穴門（穴戸）について

穴門（穴戸）・長門は、表記ではなく国名そのものが変更された国である。日本書紀における穴門（穴戸）および長門の用例を表にして示す。

次の表で、「群1」としたのは森博達氏による日本書紀区分^{注5}、「群2」としたのは葛西太一氏による日本書紀区分^{注6}である。以下、各節も同様。

本文	所在	卷	群1	群2
穴門	垂仁 ^二 是歳注	六	β	丙
穴門	仲哀二・三・一五	八	β	丙
穴門	仲哀二・三・一五	八	β	丙
穴門	仲哀二・九	八	β	丙
穴門	仲哀二・九	八	β	丙
穴門	仲哀八・一・四	八	β	丙
穴門	仲哀八・一・四	八	β	丙
穴門	仲哀九・二・五	八	β	丙
穴門	仲哀九・二・二二	八	β	丙
穴門	神功前九・二二・二四	九	β	丙

穴門	神功前九・一二・一四	九	β	丙
穴門	神功元・二	九	β	丙
長門	継体二・八・一	一七	a	甲
穴門	欽明二・二是歳	一九	a	甲
穴門館	欽明二・二是歳	一九	a	甲
穴戸国司	白雉元・二・九	二五	a	乙
穴戸国	白雉元・二・一五	二五	a	乙
穴戸	白雉元・二・一五	二五	a	乙
穴戸	白雉元・二・一五	二五	a	乙
長門国	天智四・八	二七	a	乙
長門城	天智九・二	二七	a	乙
長門国	天武五・一・二五	二九	β	丁

*

たまふ。

日本古典文学大系『日本書紀 下』三六ページの頭注、および五四七ページの補注には、この箇所（原文は「長門以東朕制之。筑紫以西汝制之。」）は、『藝文類聚』所引の『漢書』の本文「闕以内寡人制之、闕以外將軍制之」から作文した旨の指摘がある。この本文は、卷一七の編者が作文する際に、編纂時の国名である「長門」を使用してしまったものと推定される。

四、淡海・科野・津島について

これら諸国は、大部分が新表記をとる中で、それぞれ一例ずつ例外的に旧表記が出現している。

具体的な数字は、「近江」七四例・「淡海」一例、「信濃」一三例・「科野」一例、「対馬」一五例・「津島」一例である。

以下、例外の本文を示す。

日本書紀の表記が国名の変遷時期を反映しているとすれば、「穴門（穴戸）」から「長門」への変化の時期は、白雉元年二月一日から天智四年八月までの間のいつか、ということになる。「穴門」と「穴戸」の相違は、これも表記が変遷した可能性はあるが、卷による相違かもしれない。

この中で、欄外に*を付けて示した継体二年八月一日の条の「長門」が、「穴門」の中に孤立している。本文は以下の通りである。

天皇、親ら斧鉞を操りて、大連に授けて曰はく、「長門より東をば朕制らむ。筑紫より西をば汝制れ。……」との

①淡海国言さく、「坂田郡の人小竹田史身が猪槽の水の中に、忽然に稻生れり。身、取りて收む。日に富を致す。……」とまうす。（天智三・一二是月）卷二七、 a 群、乙群

②科野国言さく、「蠅群れて西に向ひて、巨坂を飛び踰ゆ。大ささ十間許。高さ蒼天に至れり」とまうす。

（斉明六是歳）卷二六、 a 群、乙群

③日羅を以て、葦北に移し葬る。後に、海の畔の者言はく、「恩率の船は、風に被ひて海に没りにき。参官の船は、津

島に漂泊ひて、乃ち始めて帰ること得たり」といふ。

(敏達一二是歳) 卷二〇、*a* 群、甲群

①②は諸国からの報告という文脈に用いられており、文章に共通点がある。日本書紀編纂時に共通の史料から引用し、その際、原資料の表記が残った可能性がある。書紀区分ではともに *a* 群・乙群である。

③は全体が報告書のような文章であり、その中の引用中に「津島」が登場している。これまた原史料の引用に際して、その表記が残った可能性があるだろう。

五、上毛野・下毛野について

「かみつけの」「しもつけの」については、上毛野二例・上野四例、下毛野三例・下野一例となっている。それらを表に示す。

表記	所在	卷	群1	群2
上毛野国	安閑二・五・九	一八	<i>a</i>	甲
上毛野国	齐明四・一一・一一	二六	<i>a</i>	乙
下毛野国	持統元・三・二二	三〇		丁
下毛野	持統三・四・八	三〇		丁
下毛野国	持統四・八・一一	三〇		丁

上野	景行四〇是歳	七	<i>β</i>	丙
上野国	景行五五・二・五	七	<i>β</i>	丙
上野	推古九・九・八	二二	<i>β</i>	丙
上野国	推古三五・五	二二	<i>β</i>	丙
下野国司	天武五・五・七	二九	<i>β</i>	丁

右のように、上毛野・下毛野の表記は *a* 群と卷三〇、上野・下野は *β* 群という風に、所在がきれいな分布を示す。編纂者グループによって表記に差が生じた可能性が高いと考えられる。ただ、上毛野・下毛野の全五例は次のようになっている。

①筑紫の穂波屯倉……、豊国の……、火国の……、播磨国の……、備後国の……、婀娜国の……、阿波国の……、紀国の……、丹波国の……、近江国の……、尾張国の……、上毛野国の……、駿河国の……を置く。

(安閑二・五・九) 卷一八、*a* 群、甲群
②守君大石を上毛野国に、坂合部薬を尾張国に流す。

(齐明四・一一・一一) 卷二六、*a* 群、乙群
③投化ける新羅十四人を以て、下毛野国に居らしむ。

(持統元・三・二二) 卷三〇、丁群
④投化ける新羅人を以て、下毛野に居らしむ。

(持統三・四・八) 卷三〇、丁群
⑤帰化ける新羅人等を以て、下毛野国に居らしむ。

(持統四・八・一一) 卷三〇、丁群

①には筑紫、豊国、火国、婀娜国、紀国、上毛野国などといった古い表記が複数含まれている点が注目される(その一方で、備後国、近江国といった新しい表記も含まれているのであるが)。日本書紀のこの条は、原資料の表記が反映された可能性もある。

一方、卷三〇の三例はいずれも、帰化した新羅人を下毛野国に居住させるといふ共通の内容であり、これまた共通の原資料の表記が反映された可能性も考えられる。

六、周芳について

山陽道の「すは」は五例ごとく「周芳」の表記である。全用例を表にして示す。

表記	所 在	卷	群1	群2
周芳	景行三・九・五	七	β	丙
周芳	仲哀八・一・四	八	β	丙
周芳	推古二・二・四	二三	β	丙
周芳国	天武〇・九・五	二九	β	丁
周芳総令	天武四・二・二	二九	β	丁

本簡は、「周防」が圧倒的に多く、全部で五一点。そのうち

藤原宮三点、平城宮・京四四点(うち長屋王邸二三点)、長岡京二点、長登銅山二点と、幅広い時代に亘っている。特に、長屋王邸出土木簡の時期は和銅三年(七一〇)から靈龜三年(七一七)までのものである。藤原京時代から平城遷都後数年間という日本書紀の編纂の最終段階の一般的な表記は「周防」であったことになる。この表記はそのまま定着し、後世に至る。

本簡におけるこれ以外の表記は、「周方」三点と、「周芳」二点である。このうち「周方」は藤原宮二点、平城宮一点である。藤原宮出土木簡の一点には「評」の字があり、大宝以前のものである。日本書紀の表記と共通する「周芳」二点の内訳は、平城宮中央区朝堂院東北隅出土のもの一点と、平城京二条大路出土のもの一点である。このうち朝堂院東北隅から出土した木簡全体のうち年紀のあるものは七点あり、その年代は神龜三年(七二六)から天平三年(七三一)の範囲に収まるので、「周芳」木簡もその年代のものである可能性が高いであろう。また二条大路木簡の時期は天平七・八年(七三五・七三六)の二年間を中心とする天平前期である。

そのような次第で、本簡によれば、この国の表記は藤原京時代から後世まで「周防」が一般的で、天平の頃に「周芳」が若干見える、ということになり、日本書紀が「周芳」表記を採用するのは不審に思える。ただし、古事記では「周芳国造」という氏族名の例ながら、唯一の「すは」表記が「周芳」であるので、この表記も大宝以前に用いられていたと推定される。日本書紀はそれを採用したのであろう。

日本書紀の「周芳」の分布はすべてβ群であるので、もしもα群にも「すは」が登場していれば、そこではあるいは「周防」の表記が採用されていた可能性もある。

七、淡・薩麻について

安房国と薩摩国は、ともに日本書紀の収録範囲の下限である持統天皇退位の年（六九七）よりも後に成立した国であるが、その名称が書紀にそれぞれ「淡」「薩麻」の表記で一例ずつ登場する。その例を示す。

①上総国に至りて、海路より淡水門を渡りたまふ。

（景行五三・一〇）卷七、β群、丙群
②大唐に遣さるる使人高田根麻呂等、薩麻の曲・竹嶋の間に、船合りて没死りぬ。（白雉四・七）卷二五、α群、乙群

まず「淡」について。「淡水門」は古事記にも一例登場する。箇所は全く異なるが同じく景行記である。

此の御世に、田部を定め、又、東の淡水門を定め、……

（古事記 中・景行）

ここは、記紀ともに安房国というよりは、房総半島最南端の安房郡の沖合いを指すものであらう。記紀が「淡水門」という全く同一の表記をしていることも興味深い。

「薩麻」については、白雉四年の時点ではまだ薩摩国は存在

していないが、書紀編纂時における「今でいえば、薩麻の曲・竹嶋の間で」といった意味合いで用いたものであらう。

なお、この国の表記は、木簡や正倉院文書など奈良時代の範囲ではすべて「薩麻」であり、「薩摩」は見えない。続日本紀では「薩摩」と表記されているので、続日本紀が成立した平安時代初期には「薩摩」になっていたと考えられるが、少なくとも奈良時代後半までは「薩麻」である。

八、越・吉備・筑紫・豊・火（肥）について

これら諸国は、それぞれ後に分割されて、越前・越中・越後、備前・備中・備後、筑前・筑後、豊前・豊後、肥前・肥後となった。その時期は天武朝とされる。

これら諸国は、日本書紀では分割される前の表記をすることが多いが、一部、分割後の表記も現れる。それら分割後の表記を年代順に表にして示す。

表記		所 在		卷	群1	群2
豊前国	景行二・九・五	七	β	丙		
筑紫後国	景行八・七・四	七	β	丙		
火前国	神功前紀九・四・三	九	β	丙		
吉備中国	仁徳六七是歳	二	β	丙		
越前国	継体前紀注	一七	α	甲		

備後国	安閑二・五・九	一八	α	甲
備前	欽明七・七・六	一九	α	甲
肥後国	推古七・四・四	二二	β	丙
備後国司	天武二・三・一七	二九	β	丁
筑後国	持統四・一〇・二二	三〇		丁
越前国司	持統六・九・二二	三〇		丁
肥後国	持統一〇・四・二七	三〇		丁

これらのうち、卷三〇持統紀の例は、当時既に分割されていた国の表記によるものと考えられる。これ以前の例は、まだ国が分割される前の時代を記述している箇所に分割後の表記が用いられ、不審である。「今の」という意味合いなのであろう。それらの本文を以下に示す。

- ①天皇、遂に筑紫に幸して、豊前国の長峽県に到りて、行宮を興てて居します。
(景行一二・九・五)
- ②筑紫後国の御木に到りて、高田行宮に居します。
(景行一八・七・四)
- ③北、火前国の松浦県に到りて、玉嶋里の小河の側に進食す。
(神功前紀九・四・三)
- ④吉備中国の川嶋河の派に、大虬有りて人を苦びしむ。時に路人、其の処に触れて行けば、必ず其の毒を被りて、多に死亡ぬ。
(仁徳六七是歳)

⑤天皇幼年くして、父の王薨せましぬ。振媛迺ち歎きて曰はく、「妾、今遠く桑梓を離れたり。安ぞ能く膝養ること得む。余、高向に帰寧ひがてらに、高向は、越前国の邑の名なり。天皇を奉養らむ」といふ。
(継体前紀)

⑥筑紫の穂波屯倉・鎌屯倉、……備後国の後城屯倉・多祢屯倉・来履屯倉・葉稚屯倉・河音屯倉、……を置く。
(安閑二・五・九)

⑦蘇我大臣稻目宿祢等を備前の児嶋郡に遣して、屯倉を置かしむ。
(欽明一七・七・六)

⑧筑紫大宰、奏上して言さく、「百済の僧道欣・惠弥、首として、一十人、俗七十五人、肥後国の葦北津に泊れ」とまうす。
(推古一七・四・四)

⑨備後国司、白雉を亀石郡に獲て貢れり。乃ち当郡の課役悉に免さる。
(天武二・三・一七)

以上の諸例ごとく、傍線を付したように、文中に当該国に属する地名が書かれているので、分割後の令制国のいずれに当たるのかは明瞭であり、日本書紀編纂時の国名を「今の」という形で示したものであろう。分かりやすいようにという意図であつたかもしれないが、真相は不明である。書紀区分論の観点からは、 α 群・ β 群、ともに含まれていて、何れかに偏在しているわけではない。

九、大倭について

最後に「大倭」をとりあげる。この国は、他の国と全く様相を異にする。他の国の表記においては、一般に新表記を標準とするのに対し、「やまと」では、旧表記の「倭」が六二例にに対し、新表記の「大倭」は一二例に過ぎず、他とは新旧が逆になっている。以下、煩瑣になるが全用例を表にして示す。「大倭」の例には①⑫の符号を付けて示した。また、a～dは、巻二九における「倭」の例である。

本文	所 在	巻	群1	群2
倭国	神武前戊午・九・五	三	β	丙
倭国造	神武二・二・二	三	β	丙
倭	安寧元・〇・二	四	β	丁
倭国	孝昭二九・一・三注	四	β	丁
倭大国魂	崇神六	五	β	丙
倭国	崇神七・二・五	五	β	丙
倭	崇神一〇・九・二七	五	β	丙
倭国	崇神一〇・九・二七	五	β	丙
倭	垂仁三五・一〇	六	β	丙
倭	景行二七・二・一	七	β	丙
倭国	景行四〇是歳	七	β	丙
倭	景行四〇是歳	七	β	丙

倭	景行五四・九・二九	七	β	丙	①
倭国	成務二・二・一〇	七	β	丙	
倭国	仲哀前紀	八	β	丙	
倭国	仲哀八・二・四	八	β	丙	
大倭	神功六二注	九	β	丙	
倭屯田	仁徳前紀	二	β	丙	
倭屯田	仁徳前紀	二	β	丙	
倭屯田	仁徳前紀	二	β	丙	
倭屯田	仁徳前紀	二	β	丙	
倭屯田	仁徳前紀	二	β	丙	
倭	仁徳三〇・九・二	二	β	丙	
倭	履中前紀	三	β	丙	
倭	履中前紀	三	β	丙	
倭	履中元・四・二七	三	β	丙	
倭	允恭七・二・一	三	β	丙	
倭采女	雄略二・一〇・六	四	a	甲	
大倭国造	雄略二・一〇・六	四	a	甲	
大倭	雄略五・七注	四	a	甲	
倭国	雄略七是歳	四	a	甲	
倭	顕宗前紀	五	a	甲	
大倭国	仁賢六・是歳	五	a	甲	
大倭国	安閑元・一	八	a	甲	

②皇太后、天皇の悦びたまふを觀して、觀喜盈懷ぎます。更人を貢りたまはむとして曰はく、「我が厨人兎田御戸部・真鋒田高天、此の二人を以て、加貢へて、穴人部とせむと請ひたまふ」とのたまふ。茲より以後、大倭国造吾子籠宿祢、狭穗子鳥別を貢りて、穴人部とす。

(雄略二・一〇・六)

③蓋鹵王、弟昆支君を遣して、大倭に向でて、天王に侍らしむ。

(雄略五・七注) (百濟新撰の引用) 日本之意。

④日鷹吉士、高麗より還りて、工匠須流枳・奴流枳等を獻る。今大倭国山辺郡の額田邑の熟皮高麗は、是其の後なり。

(仁賢六・是歲)

⑤都を大倭国の勾金橋に遷す。因りて宮号とす。

(安閑元・一)

⑥天皇を大倭国の身狭桃花鳥坂上陵に葬りまつる。

(宣化四・一一・一七)

⑦時の人稱ひて曰へらく、「大倭の天の報近きかな」といへり。(齊明七・五・二三注) (伊吉連博得書の引用) 日本之意。

⑧大倭国、瑞鷄を貢り。東国、白鷹を貢り。近江国、白鵝を貢り。

(天武四・一・一七)

⑨大倭・河内・摂津・山背・播磨・淡路・丹波・但馬・近江・若狭・伊勢・美濃・尾張等の国に勅して曰はく、……

(天武四・二・九)

⑩美濃の軍将等と大倭の桀豪と、共に大友皇子を誅して、首を伝へて不破宮に詣づ。

(持統称制前紀)

⑪使者を遣して、幣を四所の、伊勢・大倭・住吉・紀伊の大神に奉らしむ。

(持統六・五・二六)

⑫大夫等を遣して、新羅の調を、五社、伊勢・住吉・紀伊・大倭・菟名足に奉る。

(持統六・一二・二四)

以上のうち、①は百濟記の引用、③は百濟新撰の引用、⑦は伊吉連博得書からの引用であり、すべて日本の意で用いられている。

④には「大倭国」の直前に「今」という語がある。「現在の」という意味合いが強く出たために、編纂時に用いられていた新表記が出てしまったものかもしれない。そういう意味では、②も、「今」という語は使われていないものの、「茲より以後(今に到るまで)」という意味合いで同断かもしれない。

⑤⑥は他の国名の場合には問題ないが、「やまと」においては「倭」を通例とするので、「大倭」は逆に例外となる。ともに卷一八の例であるので、卷一八の執筆者の書き方なのである。

⑧⑫は新表記が用いられており、他の国名の場合と同じである。文中に列挙されている他の国名もすべて新表記であった、整合性がある。卷二九・卷三〇に至って、やっと新表記が通例となり、他の国名の場合と整合性が取れたというべきか。ただし、卷三〇はこれが「やまと」の全用例になるが、卷二九の場合には「倭」も四例用いられている。以下の通りである。

a 対馬国司守忍海造大國言さく、「銀始めて當國に出でたり、即ち貢上る」とまうす。……凡そ銀の倭國に有ることは、初めて此の時に出来たり。
(天武三・三・七)

b 倭國の添下郡の鰐積吉事、瑞鷄を貢れり。

(天武五・四・四)

c 倭國の飽波郡言さく、「雌鷄、雄に化れり」とまうす。

(天武五・四・四)

d 倭の葛城下郡言さく、「四足ある鷄有り」とまうす。

(天武一三是年)

a は日本の意で用いられている。b c d は書式に共通性が見られるので、同じ資料に依るものである可能性がある。

おわりに

以上、日本書紀における国名表記の實際を分類して考察してきた。

日本書紀の国名表記は、原則として新表記を採用するが、一部、旧表記に依ったところもある。その多くについては、ここに述べたように、その理由や傾向を説明することができる。

「やまと」については、他の国とは全く異なり、旧表記を基本として、一部に新表記を用いている。ここで例外となる新表記の「大倭」が用いられている部分について、その理由はほぼ明らかにし得たが、肝腎な、新旧表記の逆転の理由はよく分か

らない。

日本書紀編者の意識では、他の国については、いわばその国であり、新表記で統一するという原則があまり抵抗なく実行されたのであろうが、「やまと」に関しては、いわば地元であり、伝説上、歴史上の時代にまで、「大倭」という新しい表記で統一することに大きな抵抗があったのであろうか。

「やまと」には、国号の「日本」もある。今回は「日本」は考察の対象外としたが、古事記では「倭建命」と表記されている人物が日本書紀では「日本武尊」と表記されている。この「日本」は国号なのか否か、などという問題もある。

今後、「日本」も含め、また、万葉集の歌の表記も含めて、「やまと」については、さらに考察を重ねたい。

また、日本書紀の地名表記については、今回は国名のみに限定したが、それ以外の地名についても、今後の別稿を期したい。

注

1 北川和秀「地名二字表記化をめぐって」(『上代文学』一一一。平成二五年一一月)など。

2 鎌田元一『律令公民制の研究』のうち「Ⅱ 律令制国名表記の成立」(平成一三年三月。塙書房)

3 国名の新旧表記を考察した研究に、直木孝次郎「古事記の国名表記について」(『人文研究』二三卷一〇分冊 昭和四十七年九月。のち『飛鳥奈良時代の研究』塙書房 昭和五十年九月)、田中卓「古事記における国名とその

表記―主として古事記偽書説への反証―」（『古事記年報』二四 昭和五十七年一月。のち『古典籍と史料』（田中卓著作集十）国書刊行会 平成五年八月）などがある。これらの研究によって、古事記の国名表記が大宝以前の表記を反映していることが明らかになった。

4 「この国は山河襟帯し自然に城を作す。この形勝に因りて新号を制すべし。宜しく山背国を改めて山城国とすべし。」（日本紀略 延暦一三・一一・八）

5 森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』（大修館書店。平成三年七月）

6 葛西太一『日本書紀段階編修論』（花鳥社。令和三年二月）
安房については「上総国の平群・安房・朝夷・長狭四郡を割きて安房国を置く。」（続日本紀 養老二・五・二）とある。また、薩麻については、「唱更の国司等^{今の薩摩国なり。}言さく、」（続日本紀 大宝二・一〇・三）とあるので、成立はこれ以降と考えられる。

*木簡の用例検索は、奈良文化財研究所のインターネットサイト「木簡庫」(<http://mokkan.korabunkuen.go.jp/ja/>)
二〇二一年一月二十九日更新版）のお世話になりました。